

## (8) 生ける者と死ねる者とを審きたまわん

村上伸

詩編 118 編 13 節-16 節  
テサロニケの信徒への手紙二 1 章 3 節-10 節

今日はイエス・キリストに関する第二項の最後のところです。「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん」。次の「われは聖霊を信ず」というところから、聖霊に関する信仰の告白、第三項になります。

さて、今日の話をする前に、第二項の全体を振り返ってみたいと思います。「聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。」ここでは傍点を打ったような言い方がされておりまして、日本語ではちょっとはつきりしませんが、ここに使われている動詞は、もともとのラテン語ではすべて完了形です。そのあとに出て来る「全能の父なる神の右に座したまえり」というところが現在形で書かれてある。そして今日読んだ「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん」というところは未来形です。

これはどういうことかと考えるのですが、この使徒信条の第二項、つまりイエス・キリストに関して告白している部分では、過去と現在と将来が問題になっていると、一応言ってよいのではないのでしょうか。過去と現在と将来。それは単に伝記的にまとめたというのではなくて、そのことを通してこの私たちの世界の歴史の過去と現在と将来をやはり考えている。つまり我々自身の過去と現在と将来がそこにやはり浮かび上がってくるような語り方がなされていると思います。

そのことについて、もう少し詳しく話したい。いま私は、この使徒信条の第二項にはキリストの過去と現在と将来が告白されている、そしてそれが私たちの世界の歴史や私たち自身の生活の過去・現在・将来と無関係ではないということを言いました。そのことを考えているうちに、はたと思い当たったのですが、私たちは今、深刻にその問題について考えさせられていると感じております。これは日本の国だけではなく、世界のすべてのところでやはりそういう問題はあるわけなのですが、とくに私たちのこの国で最近起こっていることを考えますと、過去と現在と未来ということが大変深く皆の気持ちの中で問題として受けとめられているということを感じないでしょうか。

例えば、この国では政治も経済もガタガタになってしまいました。ついこの間までは「経済大国」とか言って、まるで将来がバラ色みたいな夢をみていましたけれども、目がさめて見ると至る所で問題が噴出しています。総理大臣の橋本さんは、六つ改革すべきことをあげておりまして、政治とか行政、財政、教育そのあと二つ何でしたか…とにかく何もかも改革しなければいけない、それを「火だるま」になってもやる、と言っておりますけれども、すべてがガタガタになっている。それがこの国の現状です。そのことを皆深刻に問題にしている。そしてその際、「どうしてこういうことになったのか」という問いが必ず出てきます。つまり過去を問題にする。過去において何か過ちがあっ

たから、今こういうガタガタの状態になってしまったのではないか、そういうふうに皆考えます。

そこで手近かなところではバブルの崩壊ということが原因だろうと言います。しかし、これはちょっと見方が狭すぎる、もう少しさかのぼって考えなければいけないのではないかという意見もあります。もっと根は深いのではないか。そこで色々な意見が出されている。

例えば教育の場面で、まあそういう言葉があるかどうか分かりませんが、「偏差値教育」というのでしょうか、次の世代を本当に人間として育てていくという教育がなされていない、ただ受験に受ければいいというふうな、教育が幼稚園からすでに始まっています。それが過去ずっと続いて来た。それが今のこういう状態を生み出した原因、つまり、諸悪の根源であるという言い方をする人々がおります。多分それも当たっているのでしょうか。或いは、もう少し大きくみて、教育だけではなくその他のことも含めて、例えば「戦後民主主義」を本当の意味で根付かせる努力を真剣にしてこなかったのがいけなかったのだ、という言い方もあります。そうかと思えば、逆にその戦後民主主義を目の敵にして、特に最近そういう声が大変際立ってきて私もちょっと心配しておりますが、戦後民主主義そのものがこの国をだめにしたのだと、声高に復古主義をとるといういわばタカ派というのでしょうか、そういう考えもあります。

中には、教育勅語を復活しなければいけない、あれでやらなければだめだとか、学校のやり方もすべて変えてしまえと言う人もいます。日本の柱になるような考え方、つまり天皇制とか、日本古来の神話とか、そういうものをちゃんと尊ぶようなやり方をしないから、こういう状態が起こったのだということです。

責任ある政治家がしばしば、本音だと思いますが、歴史認識についての問題発言を繰り返して近隣諸国の顰蹙を買っておりますけれども、その背後には過去の認識の問題が根底にあるのではないのでしょうか。こういう意味で、現在と過去というものを皆が色々な仕方で問題にしております。

それでは未来はどうなるか。殆どの方がいまや幻想を持たない状態です。大変に見通しは暗い。これはしばしば新聞やテレビで言われていることですが、政治の失敗のつけがすべて国民に安易に転嫁されて、消費税だって5%に上がりましたし、税金はこれからどんどん上がるでしょう。旧国鉄の膨大な負債が残っているのに新しく新幹線を作るとか、すべてのことが財政上の見通しをもたないままに、国民の税金に転嫁されるというそういうやり方ですね。ですから見通しは非常に悲観的です。悲観的な気分の中では、極端な言い方なんかも出てきますから、必要以上に気にすることはないのだと思いますけれども、とにかくこの国の現在を考えると、過去に何か原因があったのではないかということになり、そこから未来の見通しは非常に暗くなる。こういう意味で、私たちは今、過去・現在・未来ということを中心にしているのだと思います。間違った過去が現在のゆがんだ状況を生んだんだ、そしてそれは暗い未来につながる。こういうふうに多くの方が過去・現在・未来のつながりを考えているのではないのでしょうか。

勿論明るい要素もないわけではありません。例えば、ハイテクと呼ばれるものがあります。高等な技術ですね。それが非常に進歩して、コンピューターも日に日に進歩しま

すし、そういうものを組み込んだシステムの発達というものは目覚ましいものがあります。これは明るい面ですけれども、それも手放しでは喜べない。なぜかといえば技術を使うのは人間だからです。その人間がどうにかなっている。そうである以上どんなに技術が進歩しても、それが悪用される危険を絶えずもっています。単純に技術に希望を託すわけにはいかない、どうも技術そのものが、最近はやりの言葉を使いますと、バーチャル・リアリティといいましょうか、人間の現実を離れたところにある偽物の現実みたいになっているのではないのでしょうか。新聞を読みますと、最近タマゴッチと称するハイテクおもちゃが出ているのだそうですね。皆さんの中にはやった人がいるのでしょうか。私も一度はやってみたいと思うのですが、小さな卵のような形をしていてボタンをおしたりすると、その生き物(?)が、病気になったり、おなかが空いたと訴えたりする。そういう色々なことに持ち主が対処していく。そうするとその生き物はよく育ったり、途中で死んでしまったりするのだそうですね。いま爆発的に売れているのだそうですね。これは象徴的な出来事だと思います。現在の状況は鬱陶しい。未来に希望をもつことも出来ない。そういう状態の中で、人々は非現実のゲームに憂さを晴らしている、そこに逃げ込むような気分になっているのではないのでしょうか。バーチャル・リアリティということが、しきりにこの頃言われるようになったのも、そういうことの現れではないかと私は思います。

そういうわけで私たちは現在、私たちの世界の過去と現在と未来というつながりを、かつてない程真剣に考えさせられていると思います。ある意味では、こういうことを真剣に考えるのはよいことだと思いますが、過去と現在と未来のつながりは、私たちの胸の中ではやはり暗いものになっています。これが私たちの今の状態ではないかと思えます。

そこで使徒信条に目を戻したいのですが、ここでも、私たちの世界や人生の過去と現在と未来が問題になっているということは先程申しました。

聖書によりますと、そもそもの始めに神がすべてをよくお造りになったということがあり、その後すぐ人間が墮落して楽園を追われた。聖書は私たちの過去をそう見ております。さらに、楽園を追放されたアダム以降の歴史は罪の歴史です。兄弟が殺し合う。人と人が殺し合う。奪い合う。傷つけ合う。そういう罪の歴史が連綿と今までつながっています。アダム以来、聖書がえがく人類の過去は、罪にまみれています。それが積み重なってキリストを十字架にかけて殺すというような結果につながったのです。先程私たちの国の現在の、こういう情けない状態を招来したのは、過去における過ちだという見方があるということを言いました。しかし聖書は、単に過ちとか失敗とかいうような見方をしていません。もっと深く、罪の歴史だと見ています。

マタイによる福音書の23章に、大変きびしいイエスの言葉が出ております。「蛇よ、虻の子らよ、どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか。だから、わたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼ

カルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちにふりかかってくる。はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる。」

ここでは現在と過去とが問題になっていますが、過去の歴史、正しい人々の血を流してきた歴史が、今の時代にふりかかってくると言われていています。単に経済政策を失敗したから、そのつけが今に回って来たというだけのことではないのです。人類が繰り返し繰り返し犯して来た罪、正しい者を殺し、正義を踏み躪る人間の罪の結果が、今のこの世にふりかかっている。そういう見方です。さっき述べた私たちの国の現状ということも、最も深い見方から見れば、そういうことと関係がある。そう考えないといけないうのではないのでしょうか。聖書が指し示している世界の、或いは人類の過去は、単に何か失敗したというふうなことではなくて、罪の歴史、罪の過去です。

ただ、聖書はそこで終わらないのです。もう一段深く掘り下げます。それはどういうことかと申しますと、過去は単に罪にまみれているというだけではなくて、その罪の問題を解決するために、神の子がお苦しみになった。そして、私たちの罪のゆるしのために血を流してくださった。人類の過去というのは、そういう過去でもあるということです。このことを抜きにして、ただ人類は過去罪を犯して来たというだけでは、人間の歴史をちゃんと見ていることにはならない。これが、使徒信条の告白しているところだと思います。

主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。

殊に現在形で語っているところがあります。「全能の父なる神の右に座したまえり」。罪人である私たちをゆるす。愛のゆえにゆるす。それが神の全能です。単に何でも出来るということではありません。愛のゆえに罪人をもゆるす。それをなさるのが全能の神です。その神の右に、いまや彼は座っていて、そこから私たちに助けの力を送るというのが、この使徒信条の告白していることですね。ですから私たちの過去というのは、単に罪にまみれた暗い過去というのではないのです。「全能の父なる神の右に彼が座っておられる。今も生きておられる。そういうことがすべて起こった過去。それが私たちの過去です。誰かに責任を負わせて、あいつがいけなかったのだという見方で過去を考えるのは一番浅い見方です。何かの失敗を自分たちの失敗として考えるという考え方もありますが、それもそこまで深くはない。私たちの過去は、罪のゆるしのために神の子が苦しみ、血を流したもうた、そしていまや全能の父なる神の右に座って、そこから私たちのために助けをとりなしていてくださる。それが私たちの過去なのです。

そこから考えますと、私たちの現在はただ嘆かわしいだけのものではありません。勿論罪の結果として、多くのゆがみがあります。それを解決するのは殆ど不可能だと思われるような時だってあります。しかし私たちの現在はそれだけのものではありません。聖書が最も深い次元から見て語っていることは、私たちの現在は、あの方が天にのぼり、全能の父なる神の右に座って、私たちのためにとりなして下さる、そういう現在です。

ローマの信徒への手紙の8章34節以下を思い出しますが、そこにはこう書いてあります。「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」そして、37節の後半以下に「わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって、輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」とあります。これが私たちの現在なのです。だめだ、だめだというのが現在ではない。もう望みがないと思われるような状態の中でも彼が共におられる。聖書が私たちに指し示している現在というのはそういう現在です。

では聖書が私たちにしめしている将来とは何でしょうか。この方が再び来られる。それが将来です。それが今日のところです。「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

先ず「かしこより来たりて」という言葉に注目したいと思います。あそこから再び来られる。キリストが再びいらっしゃる。私たちを愛するために命を捧げてくださったキリストが、再び神の力によって到来する。これが私たちの世界の将来です。

私はここで意識的に未来という言葉ではなくて将来という言葉を使いました。それは実は、京都大学の宗教哲学の教授であった波多野精一先生の「時と永遠」という本を若いころ読んで、強い影響を受けたからです。その中で先生が、「未来」というのはキリスト教的にこの世界の歴史を考える場合にふさわしくないという意味のことを書いている。未来というのは「未だ来らず」という否定形の中に含んでいます。「未来」と言うときには、先のことは分からないまだ来ていないことなのですから、私たちに分かるわけがない。すべて未知数なのです。しかし、キリスト教的に、聖書的に考えるならそうではないと波多野先生は言います。それは「将に来らんとする」。キリストはいまにも来ようとしている。私たちの将来というのは、そういう時なのだということです。

私はそれを読んで、深く考えさせられました。世界というのは先が分からないものではなくて、キリストがいまにもおいでになるところであり、歴史もまたそういう時なのです。そういう意味で私は意識的に将来という言葉を使っております。「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん」。あの方がおいでになる。私たちの将来はそういうものです。

しかし、あとの半分はなにかひっかかると感じる方も多いかもしれません。先程読んで頂いたテサロニケの信徒への第二の手紙の中にも、「あなたがたを苦しめている者には、苦しみをもって報いる」とか、「神を認めない者や福音に聞き従わない者に、罰をお与えになる」とか、「栄光に輝く力から切り離されて、永遠の破滅という刑罰を受けらるでしょう」とか、そういう厳しい審きの言葉が語られています。そういうことに抵抗を感じる方もおられるかも知れませんが、しかしこれは、やはり抜きにするわけ

にはいきません。たしかに審きが行われます。どんな生き方をしてもどうせ大差はない、大した違いはないなどとたかをくくって生きることは、私たちにはゆるされていません。やがていつか神様の前で、私たちは申し開きをしなければならない。審かれなければなりません。聖書はそのことを真剣に取り上げており、使徒信条もそのことを告白しています。

「生ける者と死ねる者とを」、つまり、今生きていようがもうすでに死んだ者であろうが、やがてあの方が再びおいでになるときには全く区別なく、審きの座につかなければならない。どう生きたか。どう生きようとしたか。それが問われる。どうせ大したことではないと、たかをくくって生きるわけにはいかないのです。神の判定が下されます。その厳しさというか、真剣さというか、それを抜きにして私たちは人生を考えるわけにはいきません。

最後にもうひとつ付け加えておきたいことは、そこでなされる審きというのは、私たちの審きではなく、神の審きだということです。神は恵み深い方です。あのイエス・キリストは恵み深く、愛に満ちた方であった。その方が神の子と呼ばれたように、聖書が私たちに伝えている神は、恵みと愛に満ちた方、慈しみに満ちた方であります。そういう意味で力ある方です。罪人をゆるす力をお持ちの方です。

今日読むべき旧約聖書の箇所として詩編 118 編を選びましたけれども、そこにはこう書いてあります。

「激しく攻められて倒れそうになったわたしを  
主は助けてくださった。  
主はわたしの砦、わたしの歌。  
主はわたしの救いとなってくださった。  
御救いを喜び歌う声が主に従う人の天幕に響く。  
主の右の手は御力を示す。  
主の右の手は高く上がり主の右の手は御力を示す」(13 節)。

こういう力をお持ちの方が私たちの神です。罪人をゆるす力です。

イエス・キリストもそういう方でした。その方が再びおいでになる。私たちがけちな報復心から、今に見ろ、あいつを審いてやる、などというのとは違うのです。この神が再びおいでになる。あのイエス・キリストが再びおいでになる。ですから「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。」というこの言葉は神の罪をゆるしたもう全能の力を信頼しながら告白する言葉ではないでしょうか。

(日本基督教団みくに伝道所 1997 年 2 月 2 日礼拝説教)